

教師と子どもの世界

【教師のまなざしが子どもに力を与える。子どもの持つ力を信じているまなざしを、子どもは感じとることができるのではないだろうか】

チャボに触ることができない小学校1年生の男の子がいる。A君である。他の子たちは、チャボと追いかけてっこをしたり、チャボを抱き上げたり楽しそうに遊んでいるが、A君は少し離れたところでじっと見ているだけだ。

担任の先生は、A君はきっと触れるようになるかと信じている。だからA君を見守っている。信じて見守っているが、心の中では、「A君がんばれ！」と叫んでいるのだろう。それは祈りにも似た心境であると想像できる。

3か月ほどたって、ようやくA君はチャボに触ることができた。A君は3ヶ月間を取り戻すかのように、夢中になってチャボで遊ぶ。担任の先生はその姿をどんな思いで見たのだろうか。

A君は自分の力で乗り越え、チャボに触ることができる自分になった。しかし、その後押しをしたのが、担任の先生の眼差しであり、祈りであったと思う。一方、先生はA君から、子どもの学び方を教えてもらったのかもしれないが、それ以上にA君の確かな成長の場面を目の当たりにさせてもらったことに、感謝したのだろう。

この話は、先生とA君だけのお話であり、何人も侵すことのできない教師と子どもの世界である。こうした中で、子どもも大人も確かに育っているのだろう。

「共育」とは、このようなことなのであろう。